

## 白川静のことば

《28》



金子都美絵・画

人は俗なるものであるから、神の声を聞き、神に近づくことはできない。しかし俗なるものもまた、神によってのみ、許され、存在しうるのである。人は欲望をもつ。欲望は神の摂理に遠いものと考えられている。そのような欲望が、そのまま実現しうるはずはない。すべての欲望が満たされるはずはなく、そのような欲望にまかされた世界に、秩序はありえない。神の許すもののみが、その秩序のなかで認められる。それで人は、その欲するところを神に向かって祈るのである。「欲する」とは、神にその実現を願うことである。

～中略～

理とは、存在の秩序と考えてよい。正しい欲望は、存在の秩序のうちにあるものである。しかしそれが欲であるかぎり、やはり神の同意を要するのである。

欲は全文では俗とかけられる。その字に含まれる谷は、谿谷の谷ではない。～中略～それは祈りの器である<sup>さい</sup>と、その祈りにたいして、神気が立ちあらわれるようすを示したものである。廟<sup>みたまや</sup>のうちには、彷彿<sup>ほうふつ</sup>としてあらわれる神気は谷であり、神の裕<sup>ゆ</sup>もそのような神気で示される。欲はその神気にたいして、口を開いて訴える<sup>なげ</sup>欠をそえたものであり、神に訴えることを欲という。欲するところを訴え望むのであるが、このような人の欲望は、聖にたいしては俗である。

